**闇の領域編**

　･･････大河リプロ川を隔てた南西の地に「闇の領域」は存在する。

元々は、草木が生い茂り、数多の動物が生息する緑豊かな大地だったのだが、世界に人間という名の癌細胞が蔓延りはじめた結果、やがて豊かな自然は破滅的なまでに破壊されてゆくことになる。

　人間の歴史は、技術の進歩と進化の積み重ねといってよい。非鉄金属の精錬から始まった文明は、やがて大量の資源とエネルギーを消費する巨大産業文明へと成長してゆき、後に「旧世界」と称される最盛期を迎えることになる。それは尽きることの無い欲望の文明であって、自然とは真逆に位置するものであった。

　巨大産業文明は、人間の欲望を支えるため、物資の大量消費を必要とした。それは大量の廃棄物を量産するという歪な構造を抱えており、そこに再生可能エネルギーやリサイクルといった概念はなく、出るゴミは、軒並み再利用されることなく棄てられていったのである。そしてその廃棄場所こそが、後に「闇の領域」の名で知られることになるリプロ川を隔てて存在する土地だったのだ。

この場所に、あらゆる「ゴミ」が捨てられた。それこそ家庭用プラスチック製品から建築廃材、数万種類に及ぶ化学物質、兵器、有害な工場廃液から放射能汚染物質にいたるまで、とにかく、ありとあらゆる種類のゴミが棄てられたのである。しかもその「ゴミ」の中には、先天的に疾患や障害、難病を患っている「人間」も多分に含まれていたのだ。そしてこの「ゴミ」の投棄は、実に一世紀にも及んだのである。

影響は、甚大だった。廃棄物の大量投棄によって緑豊かな自然が破壊されただけではない。巨大産業文明から出た「ゴミ」は、そこに棲んでいた生き物たちに遺伝子レベルでの悪影響をもたらして、長い年月をかけ、彼らを元の形から変異させ、世代を超えるごとにどんどんと醜悪化させていき、ついには完全なる「化け物」へと変えてしまったのである。後に「暗黒生物」と呼ばれる存在へと「進化」させたのだった。

　このことに、人間たちは気づかなかった。いや、より正確に言えば、気づけなかったのだ。それどころではなかったから。なぜならば、巨大産業文明は、欲望の暴走の果て、後に「最終戦争」と呼ばれる大戦争によって、自壊する泥の人形のように崩壊してしまったからである。これは天罰というよりは、むしろ人間たちの自業自得の結果であった。

　･･････旧世界が最終戦争で滅亡した後、人類文明は、おびただしい数の死と引き換えに再出発を余儀なくされた。

人々は旧世界の遺跡に寄生するように生きながら、野生化した家畜を狩り、アスファルトを剥がして地面を耕し、作物を栽培しながら、紙幣ではなく金属貨幣を重宝して細々と経済を循環させた。この時代、電子製品はすでに役に立たなくなっていたが、残されていたわずかな紙本が知的教師となって人類の英知を繋ぎ留め、人間という種は辛うじてケダモノに堕ちることを免れていたのだった。

　かくして人類の文明は、泥沼の中からの再出発をするにいたったわけだが、旧世界が残した弊害は大きかった。特に旧世界でエネルギーと金属資源が膨大に消費されていたため、地表付近に残されていたわずかな資源では、かつての水準まで文明を発展することは叶わず、かくして人類文明は中世を彷彿とさせるレベルでの永い停滞を余儀なくされたのだった。

だが、極一部の人間は、人類文明の完全なる再興を目論み、発展の原動力となる「資源」を血眼になって探していたのだった。

　同じ頃、リプロ川を隔てて存在する「闇の領域」では、そこに棲む生物種たちが独自の進化を遂げていた。それは人間も、動物も、昆虫も、さらには植物すらも、生物としての「種の境界」を曖昧にした進化であって、融け合い、交じり合い、そこからさらに分裂した結果、奇々怪々な異形生物が蠢く、さながら別の惑星のような暗黒の世界が誕生するに至ったのである。

　それは全体主義的生物社会であった。「闇の領域」それ自体が一個の「生物」として機能し、「ある目的」を持って活動するようになったのである。

それは女王を中心とした蟻や蜂の社会構造によく似ていたが、異なる点は、一匹が繁殖活動を担うのではなく、繁殖に「他生物」を利用した点だろう。これは、彼ら闇の生物たちの遺伝子が、常に崩壊の危機に晒された非情に脆い状態にあるからであって、常に新鮮な遺伝子を欲していたからである。そして、他生物を繁殖に利用するにあたって、もっとも利用された種が「人間の女」であった。理由は、遺伝子の優劣による選別の結果ではなく、ただ単純に、欲望の核となった主観が元人間によって構成されていたからである。自然界において、人間ほど性欲が強い存在は、極めて稀有であるゆえの事象であった。

　このような事情があって、「闇の領域」に潜み棲む「暗黒生物」たちは仲間の数を増やすべく、しばしばリプロ川を越えて人間世界への侵入を繰り返し、町や村を襲っては人間の女たちを拉致していった。

　暗黒生物にさらわれる女は、みな若くて健康な者たちばかりだった。若ければ若いほど卵巣に蓄えている卵子が新鮮で、繁殖活動が永くおこなえることを、「闇の領域」の暗黒生物たちは知っていたからである。ゆえに、彼女たちに待ち受ける運命は悲惨を極めた。

　暗黒生物たちにさらわれた女たちは、皆、一様に、暗黒生物たちが本拠地とする「肉の巣」へと連れて行かれた。この巣は、長径一キロメートル、短径五〇〇メートル、低高三〇〇メートルにも及ぶ巨大な物体で、おぞましい色彩を帯びた「生きた肉」によって構成されていた。この巣は、数千万匹の暗黒生物たちが融合して生み出された肉の世界であって、内部は入り組んだ通路と無数の蜂の巣のような構造をしていた。すなわち、内部に無数の「個室」が存在していたのだ。

この個室――「肉の牢獄」に閉じ込められた女たちは、衣服を剥かれて全裸にされると、触手で拘束されたり、あるいは肉壁に四肢を埋められるなどして自由を奪われた後、繁殖型の暗黒生物によって様々な凌辱行為を受けることになる。それこそ全身のありとあらゆる穴という穴を犯されるのだ。膣穴はもちろん、肛門も、尿道口も、口腔も、鼻穴も、耳孔も、さらには乳穴も、臍穴も。

暗黒生物たちに人間の常識は通用しない。彼らにとって人間の女とは、それ自体が丸ごと繁殖用の肉袋そのものであって、身体のありとあらゆる場所で「妊娠」させることができるのだ。

もちろん、最上の繁殖方法は、より確実に繁殖がおこなえる卵子を活用する方法であるのだが、暗黒生物たちの精子は極めて生命力が強いため、中には卵子を用いずとも母胎となった女から栄養を吸収して成長する個体も存在しており、そのため、子宮だけでなく、膀胱でも、消化器官内でも、乳房でも、さらには頭蓋内でも、女を「妊娠」させることができるのだった。その悲惨さといったらなかった。

「いやああぁああぁぁあぁぁぁあぁあぁぁああぁぁぁッッッ！　助けてッッ、助けてえぇえぇぇえぇえぇぇえぇぇぇえぇぇぇぇぇぇッッッ！　誰かッッ！　お母さんッッ、おがあざあぁぁあぁぁぁあぁんッッッ！」

「やだあぁぁあぁぁあぁあぁぁぁあぁぁぁッッッ！　犯さないでッッ、おおおお願いだがらッッ、もうおがざないでぇえぇぇええぇぇえぇえぇぇえぇぇぇぇッッッ！　やだあぁあぁぁああぁあぁあぁあぁぁぁあぁぁぁッッッ！」

「うぎゃああああああああああああああああああッッッ！　おっぱいッッ、おっぱいがッッ、醜くッッ、みにくく膨らんでえぇえぇぇえぇぇえぇぇぇぇぇぇッッッ！　ぎゃああああああああああああああああああああッッッッ！」

「いやだああぁあぁぁああぁぁあぁぁぁああぁあぁぁあぁぁあぁぁぁぁぁッッッ！　出てこないでッッッ！　お願いッッ、おねがいだがらッッ、おじりがらッッ、おじりの穴がらッッ、でてこないでっだらあぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁぁぁぁぁッッッ！　があああああああああああああああああああああああッッッ！」

「おおおお尻からッッ、おおおおっぱいからッッ、化け物が生まれてッッッ！　産まれてえぇえぇえぇぇええぇぇぇえぇぇぇぇぇえぇぇぇぇえぇぇッッッ！　這い出てぎだああぁあぁぁぁあぁあぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁぁぁッッッ！　んぎゃあああああああああああああああああああああああああああああッッッ！」

「う、嘘よッッ、こんなの嘘よぉおおぉおぉぉぉおぉぉぉぉおぉぉぉぉッッッ！　ありえないッッ、ありえないありえないありえないぃいぃいぃいぃいいぃいいぃぃぃぃぃッッッ！　醒めてッッ、夢なら醒めてッッ！　早く醒めてったらああぁあああぁあぁああぁぁあぁぁぁぁぁッッッ！　いやあああああああああああああああああああああああああああああああッッッッ！」

「もういやああぁああぁああぁぁあぁぁぁあぁぁあぁぁあぁぁッッッ！　もう産みたくないッッ、産みたくないのッッ！　産みたくないったらあああぁあぁあぁぁあぁぁあぁッッッ！」

「ガバガバになるッッ！　ガバガバになっぢゃうッッ！　アソコがッッ、お尻がッッ、おっぱいがッッッ！　うわあああああああああああああああッッッ！　殺してッッッ、お願いだがらッッ、もうごろじでよッッッ！　ごろじでっだらああぁぁあぁぁぁあぁぁぁああぁあぁぁぁぁぁああぁぁぁッッ！　ごろじでええぇぇえぇぇぇえぇぇぇえぇえぇぇえぇえぇえぇぇえぇぇぇええぇぇぇぇッッッ！」

暗黒生物たちが巣窟とする「肉の巣」からは、苗床にされた女たちの悲哀に満ちた絶叫が絶えることなく響き続けた。

苗床にされた女の中には、この悪夢めいた現実に耐えることができず、舌を噛んで自殺する者も少なくなかったが、その試みが成功することは決してなかった。なぜならば、女たちの肉体は傷つくつど、それがほんの少しのかすり傷であったとしても、すぐに謎の液体が注入されて傷を治されてしまうからである。かくして女たちは生かされ続け、ただひたすら暗黒生物たちの幼体を孕み産み続けることになるのであった。それも、ほとんど半永久的に。

　人間たちもただ手をこまねいているだけではなかった。最初は恐れや怯えだけだった感情も、妻や娘、姉妹、恋人、さらには孫娘が容赦なくさらわれていく状況に対し、人間たちは次第に怒りを募らせはじめ、それはやがて大きなうねりとなっていった。「闇の領域」と境を接する国々を中心に、「闇の領域」に対する征伐論を唱える声が少しづつ増えていったのである。

　時同じくして、文明社会の完全なる再興を目論む一派が「闇の領域」の地下に膨大な資源が眠っていることを突き止めた。金属資源とエネルギー資源のふたつを手に入れることができれば、伝承した知識と技術を基盤にかつての繁栄を取り戻すことができる。彼らは、大きくなったうねりを利用することにした。

かくして「英雄」が登場することになる。暗黒生物の撲滅を掲げ、女の身でありながら自ら先頭に立って「闇の領域」へ攻め込もうとする者が現れたのだ。

彼女の名はティリエル。母親を暗黒生物にさらわれたという過去を持ち、幼い頃から暗黒生物たちによる脅威を目の当たりにしてきた彼女は、義憤に駆られて立ち上がった。

「我々を苦しめるあの醜いバケモノを撲滅させましょう！　さもなければ、奴らによる襲撃はこれからも続くことになり、もっと多くの人たちが悲しむことになります！　さぁ、みなさん、立ち上がるのです！　そして暗黒生物の絶滅を！」

彼女の過激な扇動は、その美貌も相まって「闇の領域」への征伐論を唱える人々からの高い支持を獲得すると、陰に陽に支援が集まり、ついには討伐部隊を編成するにいたった。大小十八か国から集まった義勇兵の数は総勢一万八〇〇〇人。武器や装備は各国からの援助によって完全武装が実現した。戦意も高く、おそらくはこの当時、世界でもっとも強い軍隊であるに違いなかった。

　出陣式にて、整列した討伐部隊の前に立ったティリエルは、あらかじめ捕まえておいた暗黒生物を自らの剣で処刑して「生贄」にすると、青い血で濡れた剣を掲げて高らかに宣言したのだった。

「今日、この日をもって、「闇の領域」による脅威は終わりを迎えることになるでしょう。我々は必ずや、かの地に潜み棲む魑魅魍魎の魔物たち全てを駆逐して、この聖戦に勝利します。人類に希望の光を！　栄光あれ！」

「「栄光あれッ！」」

集まった兵士たちの目に、ティリエルの姿はさながら、救世の聖女のように映ったに違いない。

　実際、ティリエルは聖女と呼ばれるにふさわしい容姿をしていた。この時、彼女の年齢はまだ一七歳。身長はやや低く、顔にはまだ幼さが残るものの、整った目鼻立ちは端麗を極め、優美さと意志の強さがその面差しに現れていた。淡い蜂蜜色の髪は背中のあたりまで真っすぐさらりと伸びており、白磁のような肌にはシミがひとつも見当たらなかった。

　だが、彼女を目の当たりにするうえで、人々の視線が真っ先に向かう先は、絶世の美貌ではなく、ひと際大きくて目立つ豊かな乳房であったに違いない。両胸に重々しく実った肉の果実は、本人の頭部より五割ほど大きく、しかも張りがあって形もよかった。乳房があまりにも大きいため、彼女が身に着ける白銀の甲冑は胸の部分の装甲が取り外されており、それゆえ移動するたびにゆさゆさと揺れるのだ。その卑猥さといったら、彼女の立ち姿を目の当たりにしただけで欲情する者が続出するほどだったという。

　このように、美と性愛の神の寵愛を一身に受けた姿形をしている彼女だからこそ、「闇の領域」に対する征伐論を唱えるにあたって人々から高い支持を得ることができたわけだが、極少数の曇りの無い眼を持つ人々は、声を潜め、不安を口にせずにはいられなかった。

「大丈夫なのか、あんな娘に大事を任せて･･････」

「あのだらしない肉体、あの身体の何処に鍛錬の痕跡があるというのだ･･････？」

「凛々しいが、苦も労も知らぬ面持ちをしている。せめて現実的な思考の持ち主であればいいのだが･･････」

多くの人々がティリエルの容姿と肉体の方にばかり目を向けるなか、ティリエルの統率者としての力量に危惧を抱く声は少なくなかった。

　しかし、その声が大勢を占めることはなかった。批判や反論の声を高らかに口にできるような雰囲気ではなかったし、意図的に不安の声がかき消されていたからでもある。

多くの人々は知る由もなかったが、これは計画された「敗北」を演出するための布石であった。「闇の領域」に棲息する大小合わせて数百万匹の暗黒生物たちを、たった一万人そこらの軍隊で討伐できるはずがなく、もし、「闇の領域」全てを駆逐するのであれば、その一〇〇倍以上の戦力が必要であることは明白である。それは全ての国々が団結しなければ実現しない数値であって、その数値を叩きだすために、ティリエルを筆頭とした討伐部隊は「贄」として派遣されたわけであった。

　ゆえに、全ての事情を知る者のひとりは、薄笑いを浮かべながら、揺らめく暖炉の炎に向かって邪悪に言ったものであった。

「担ぐなら、神輿は綺麗で軽い方がいい。せいぜい、悲劇的な最期を迎えてくれたまえ。なるべく無惨に、そして悲惨に、人々の怒りと同情を買うよう、哀れに惨たらしく。くふふふふ･･････」

かくしてティリエルに率いられた一万八〇〇〇人の討伐部隊は南西へと向かい、リプロ川を渡って「闇の領域」へと足を踏み入れたのだった。

　それはレスター暦六四〇年七月一〇日のことであった。

**闇の襲撃編**

それはレスター暦六四〇年七月二八日のことであった。

　場所は、リプロ川を渡って四〇キロメートルほど奥へ進んだ何処か。時刻は深夜で、周囲は深い暗闇によって覆われており、一寸先も見えないほど暗い。

その暗い中に、若い女の悲鳴が木霊し響いたのだ。

「だ、誰かあぁあぁあぁぁあぁぁあぁぁぁあぁッ、誰か居ないのッ！？　誰かあぁぁぁああぁあぁあぁぁッ！　誰か助けてッッ、だれかああぁぁぁあぁぁあぁあぁぁぁッッッ！」

半ばべそをかきながら、ただひたすら情けなく、切羽詰まった声で助けを求めながら、逃げるため、暗くて深い闇夜のなかを必死になって走る女。大きくて豊かな乳房を激しく上下にぶるんぶるんと揺らしながら、荒れた大地を必死に駆ける。駆けながら、なおも大きな声で叫び続けた。

「たすけてええぇぇぇえぇええぇぇえぇぇぇッ！　たすけてたすけてッッ、たすけてえぇえぇぇえぇぇえぇぇえぇぇぇぇッッッ！　誰かッ、だれか助けてッッ、だれかあぁああぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁあぁぁあああぁぁぁあッッッ！」

同じ言葉を繰り返しながら、叫び走るその女の名はティリエル。

かつて救世の聖女と謳われた彼女の手に武器はなく、薄い布地のような衣服を纏っている以外は、ほとんど無防備に近い状態だ。靴も履いていない。ゆえに、白い足裏は土と血で酷く汚れていたが、それでもなお、必死に走っているのには切実なる理由があった。後ろから迫る影の群勢がいたのだ。

「グガガガガガガガガッ！」

「ギュイーッ、ギュイーッ、ギュイイーッッ！」

「ゴゴエーッ、ゴゴゴエエーッ、ゴゴゴゴエエエエーッ！」

「ひぃッ、ひぃいいいいいいいいッッッ！　ひぃいいいいぃいいぃいぃいぃぃいぃぃいぃぃいぃぃッッッッ！」

後ろから響いてくる恐ろしい魔物の声を耳にして、ティリエルは絹を裂くような悲鳴をあげた。悲鳴をあげながら、反射的に後ろを振り向く。振り向かずにはいられなかったからだ。そして、見てしまった。自分を追ってくるおそろしい化け物たちの群れを。巨大で醜悪な異形生物の群勢を。

「「ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！」」

「いやあああああああああああああああああああああああッッッ！」

　そう、彼女はいま、追われている最中なのだ。「闇の領域」に潜み棲むおぞましい姿形をした邪悪な暗黒生物たちに激しい敵意と憎悪を向けられて、怒りの追撃を受けている最中なのだ。

　何十という恐ろしい化け物の群れが、ティリエルの背後に迫る。

　ティリエルがより一層、強く、そして大きく叫んだ。

「助けてッッ、たすけてえぇえぇぇえぇえぇぇえええぇぇええぇえぇッッッ！　誰か助けてッッッ！　誰かッッ、だれかああああぁあぁあぁぁああぁぁあぁあぁぁぁぁぁあッッッ！　誰かあぁあぁぁあぁあぁあぁぁぁあぁあぁぁぁぁあッッッ！　いやあああああああああああああああああああああああッッッ！」

深い絶望が迫ってくる光景を目の当たりにして、ティリエルの美しい顔面に恐怖が翼を拡げた。それと同時に、股間も黄色く濡れはじめた。情けなくも失禁してしまったのである。

「な、なんでッ、どうしてッッ、どうしてこんなことにぃぃぃッッ！　なんであたしがこんな目にぃいぃいぃぃぃッッッ！」

強いアンモニアの臭いを放ちながら、ティリエルはなおも全力で逃げ続けた。なぜ自分が、どうしてこんな目に遭っているのかについてを声に出して自問しながら。自問せずにはいられなかったからだ。

　うまくいっていた。

　全てがうまくいっていたのだ。

　それが、どうして･･････！

　･･････時間は少し遡る。

レスター暦六四〇年七月一〇日、リプロ川の渡河に成功した一万八〇〇〇人の討伐部隊は、その日のうちから暗黒生物たちの駆逐を開始した。目に付く暗黒生物たちを片っ端から血祭りにあげてゆき、最初の三日間で大小合わせて五〇〇〇匹の暗黒生物を討つことに成功したのだ。その数は日を追うごとに増えてゆき、一週間で三万匹を超えるにいたった。しかもその間、討伐部隊の犠牲は少なく、死傷者の数は合計で千人に満たなかったのである。

「バケモノどもめ、見たか我らの強さを、力のほどを！　われわれ人間を苦しめてきた「報い」をその身をもって思い知るがいい！」

築かれた暗黒生物たちの死体の山を前にして、ティリエルは上機嫌だった。

圧倒的な勝利は気持ちよかったし、達成感もあった。そしてなにより、醜くて恐ろしい化け物たちが命を断たれて死んでゆく様は、彼女に性的絶頂にも似た快感をもたらしていた。

ティリエルは、暗黒生物たちが流す死と血に酔っていたかもしれない。暗黒生物たちが思ったよりも弱く、そして戦うよりも必死に逃走を選択する姿は、物乞いをする老人のように、哀れで無様であった。そのような弱い存在を惨たらしくいたぶる時、人間はサディストの本能を剥き出しにするのだが、その時、脳みその中では快楽物質が大量に分泌されるのである。

ゆえに、彼女はより一層、暗黒生物たちに対して無慈悲に振る舞った。

　ある時、築かれた死体の山の中で、微かに蠢くモノがいたことがある。

「ギ、ギィ･･････、ギィィ･･････」

まだ小さな暗黒生物の幼体が、青い血を流しながら、死体の山から這いずり出てきた。膿爛れた奇形の犬のような醜悪な姿形をしていたが、それでも必死に、そして懸命に生きようとしていたのである。

それを、ティリエルが見つけた。

「ん？　こいつ、まだ生きていたのか･･････」

ティエルが腰に帯びていた剣を抜いた。白刃がギラリと光る。そして、その鋭い剣先で、幼体の胴を貫いたのだ。

グサッ･･････。

「ギィィィィ･･････！」

幼体が苦しげな悲鳴をあげた。その悲鳴を聞きながら、ティリエルは引き抜いた剣で再度、幼体を貫いた。

「醜いおまえたちに生きる価値はない。これまでの「報い」を受けながら死ぬがいい！」

グサッ、グサッ、グサッ、グサッ･･････。

「ギィ、ギィィィ〜･･････」

ティリエルに剣で何度も何度も刺突され、暗黒生物の幼体はもがき苦しんだ。それでもなお、生きようと――逃げようとしていたが、目的を果たすことはできなかった。暗黒生物の幼体は、ティリエルに何度も何度も剣で突き刺された後、弱々しく身体を震わせて、その小さな命を儚く散らしたのだった。

「ふん、死んだか。他愛ない」

ティリエルの必要以上に残酷な行為を咎める兵士は誰もいなかった。兵士たちもティリエル同様に、暗黒生物たちが流す死と血に酔っていたからである。

　彼らは笑いながら殺戮に狂奔していた。

「おい、この野郎、まだ息があるぞ。心臓を抉りだしてやる」

「へっ、哀れな目つきをしてやがる。死にかけたジジイみたいな目だ」

「ふふふん、恐ろしいのは見た目だけか。とんだ見かけ倒しの連中ばかりだぜ」

　兵士たちもティリエル同様に、狩った暗黒生物の命を断つ時、必要以上に傷つけ、苦しめていた。生きたまま目玉を抉り、皮を剥ぎ、牙をへし折って、内臓を引きずりだしたのであった。

「ウガァ、アァァ･･････」

「グガ、グウガアアアア･･････」

「キィ、ヒィ、クヒィィ･･････」

その哀れな鳴き声を聞いて、兵士たちは不気味に笑うのだった。

「ふふふふふ･･････」

「はは、あはははは･･････」

「わははははははは･･････」

暗黒生物を傷つけ殺すという行為は、きっと気持ちがよかったに違いない。その証拠に、兵士たちは暗黒生物たちを殺す時、顔に愉悦の笑みを浮かべて、目をギラギラと輝かせながら、口から涎を垂らしていたのだから。

　そんな兵士たちに向かって、ティリエルは高らかに声をかけた。

「さあ、みんな、もっと奥へ進むわよ！　魔物たちに人間の強さを思い知らせるために、そして人類に一〇〇年の安寧をもたらすために！　魔物たちを討って討って討ちまくるのよ！」

「「おおおおおおおーッッ！」」

かくして討伐部隊は、さらに奥へと、暗黒生物たちが多く潜む「闇の領域」の奥深くへと歩を進めてゆくのであった。

　この時、血に酔った彼らは慎重さを欠いていた。戦った暗黒生物たちがあまりにも弱かったため、彼らの強さを見誤っていたからでもある。まさか、リプロ川近辺に棲息している暗黒生物たちが、生まれた時から力の弱い「未成熟」な個体ばかりの集合体であるとは思いもしなかったはずだ。

　ゆえに、この時、むやみやたらに奥へと進むのではなく、砦なりを築いてそこを拠点にして探りを入れるように暗黒生物たちの駆除を進めていくべきだったのだ。そうすれば、なにか危機が生じた際、砦に逃げ込むことで籠城もできるし、人界側からの支援や救援を受けることも容易かったはずだ。

　しかし、初戦で暗黒生物たちに大勝したことで、ティリエルに率いられた討伐部隊は慢心しており、そうはしなかった。そして、悪いことに、侵攻したその先々でも、弱い未成熟な群体とばかり遭遇してしまったため、彼らは勘違いしてしまったのだった。

「俺たちは強い、強い！」

と。

兵士たちは進む先々で蛮勇を振るい、全能感に満ちた剣で数多の暗黒生物たちを葬り続けた。それも必要以上に残虐に、残酷に。そして、いつしか簡単には引き下がれないような深い場所にまで達してしまったのだった。「闇の領域」が牙を剥いたのは、まさにその時だった。

　レスター暦六四〇年七月二八日の深夜、野営をしていた討伐部隊の陣地を暗黒生物の群れが襲った。怒り狂った数千匹の暗黒生物たちが、醜悪な身体に凶悪な力をみなぎらせて油断していた討伐部隊を四方八方から襲ってきたのである。

　すでに承知の通り、独自の進化を遂げた「闇の領域」は、それ自体が一個の生命体として機能しており、弱い個体も強い個体もまとめてひとつの「生物」なのである。ゆえに、ティリエル率いる討伐部隊がおこなってきた虐殺行為は、彼らの激しい怒りを買わずにはいられなかった。討伐部隊は瞬く間に大混乱に陥った。

「「うわああああああああああああああッッッッ！」」

本気を出した暗黒生物たちの総攻撃に、油断した人間たちは成す術がなかった。隙を突かれたため、軍隊として組織的に戦うこともままならず、卵の薄殻を踏み潰されるがごとく最初の一撃で粉砕されてしまった。そして、自分たちがしてきた行いの報いを受けたのだった。すなわち、生きたまま目玉を抉られ、皮を剥がされ、歯を抜かれ、内臓を引きずりだされたのだった。

「た、たすけて、たすけてくれえぇぇえぇぇ･･････」

「や、やめてくれ、たのむ！　もうやめてくれえぇぇえぇ･･････」

「ひぃぃぃぃ！　し、しにたくない、しにたくないぃいぃぃいぃぃ･･････」

それは驕り高ぶった勝者の声ではなかった。哀れな敗者そのモノの悲痛極まりない声であった。

　暗黒生物たちの総攻撃を受け、最初の一撃で命を失わずにすんだ者たちは、戦意を喪失し、夜の闇に紛れて逃げ散っていった。だが、その運命は悲惨を極めた。

野垂れ死ねた者はもっとも幸いで、多くの者は逃げた先で暗黒生物たちに捕まり、ありとあらゆる苦痛を与えられて殺された。それこそ、自分たちが「闇の領域」に侵入してからしてきたことをそのままされたのである。すなわち、より長く苦痛を与えられて殺されたのだった。

自らの努力と才能、そして多分の幸運により、どうにか生き延び、人界の地に戻ることができた者もいるにはいたが、その数はとても少なかった。かくして一万八〇〇〇人の討伐部隊はそのことごとくが暗黒の大地に溶け去ってしまったわけだが、彼らはまだ幸いであった。男だったから。そして、死なせてもらえたから。

　暗黒生物たちの総攻撃を受けた時、ティリエルは自分の天幕で眠りの神の寵愛を受けていたが、外から聞こえてきた悲鳴と怒号を聞いて飛び起きた。

「な、なにッ！？　何事ッ！？」

身支度を整える間もなく天幕の外へ飛び出した彼女が目にした光景は、暗黒生物たちによる報復と殺戮の饗宴だった。

　味方の兵士たちが悲鳴をあげながら口々に助けを求め、泣きながら逃げ惑い、そしてこれまで見たこともなかった強大な暗黒生物たちに次々と無慈悲に殺されてゆく光景を目の当たりにした時、ティリエルの勇気はたちまち蒸発してしまった。

「きゃあああああああああああああああああああああッッ！」

　ティリエルは、我を忘れて逃げだした。それこそ武器も持たず、靴も履かずに裸足で、そして味方を見捨てて。

かくして現在にいたる。

　戦いもせず、陣から逃げ出したティリエルは、必死の逃走の果てに追い詰められてしまった。いまや彼女は、自分よりも巨大な数十匹の暗黒生物たちに包囲されてしまっており、それはさながら、一匹のネズミがネコの群れに取り囲まれた光景に酷似していた。

しかし、この後、彼女の身に起こるであろう恐怖と絶望は、ネズミが辿る運命の非ではなかった。

「ひ、ひぃいぃぃいぃいぃぃぃいぃぃッッ！　お、お願いッ、こ、殺さないでッッ！　いいい命だけはッ、いのちだけは助けてッッ、たすけてええぇぇぇえぇえぇえぇぇ･･････」

ティリエルは命乞いをした。美しい顔を恐怖でぐちゃぐちゃにしながら、自分を取り囲む暗黒生物たちに向かって、無様にも命乞いをしたのだ。自分がこの大地でしてきた行為を忘れて。その姿に、救世の聖女と謳われたかつての姿は微塵もなかった。

　そんな彼女に向かって、一匹の暗黒生物が前に進み出た。巨大で、醜悪な容姿をした、全身が膿爛れた狼の奇形種のような個体だった。その個体が、ティリエルに向かって「人語」の響きを帯びた声を発したのだった。

「オ、オマエ、ハ･･････コロ、サナイ･･････」

「え･･････」

その予想もしなかった言葉を聞いて、一瞬、ティリエルの表情に生色が蘇った。助かるかもしれない、と思ったからだ。

　しかし、希望はすぐに絶望へと転じることになる。

　巨大で醜悪な姿形をした狼の奇形種のような個体がティリエルに向かって再度言ったのだ。

「オマ、エハ、コロサナイ･･････イカ、シテ、イカシ、テ、イカシテイカシテイカシツヅケテ、「罪」ヲ、ツグナワセテヤル･･････」

それは強い憎悪と怒りに満ちた言葉だった。そう、ティリエルを包囲した暗黒生物たちは怒っていたのだ。この暗黒の大地にて、人間たちが、弱い仲間たちにおこなってきた残虐非道な所業の数々に激怒していたのだった。ゆえに、暗黒生物たちは決意していたのだった。

コノオンナニ、「罪」ヲツグナワセルテヤル―――。

と。

「あ、ああっ･･････」

暗黒生物たちの強すぎる敵意と怒りをまともに受けて、ティリエルの意識が遠のいていった。身体から力が抜け落ち、その場に崩れるように倒れてしまった。

どさっ。

ティリエルの身体が地面に横たわった時、彼女の意識はもはやなかった。

　そんな彼女に向かって、取り囲んでいた暗黒生物たちが近づいてきた。ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと。

「「罪」ニハ、「罰」ヲ･･････」

「「罪」ニハ、「罰」ヲ･･････」

「贖罪ヲ、贖罪ヲ、贖罪ヲ･･････」

呪詛のように同じ言葉を繰り返しながら、意識を失ったティリエルの身体を、巨大で醜悪な姿形をした狼のような奇形種が大きな口で咥えて回収した。食べるわけでは、むろんない。命を断つことは簡単だが、それでは意味がないのだ。生かして、生かして、生かし続けて、罪を償わせなければならない。罰を与え、贖罪させるのだ。

「「罪」ニハ、「罰」ヲ･･････」

「「罪」ニハ、「罰」ヲ･･････」

「報イヲ、報イヲ、報イヲ･･････」

彼らは踵を返し、夜の闇へと引き上げていった。自分たちが拠点とする「肉の巣」へと戻るために。

　これより先、ティリエルの身に待ち受ける運命は、今宵の闇よりも深い「絶望」であることは疑いようがなかった。

しかし、この時はまだ、そのことを、ティリエルは知る由もないのであった。

**恐怖の洗礼編**

　･･････明かりの乏しい薄暗い空間の中、ティリエルは、全身の肌を生暖かい風に撫でまわされていることに気づいて意識を取り戻した。

「う、うぅ～ん･･････」

まだ朦朧とする思考を、まどろみの泥濘よりすくいあげる。最初、頭には、霧のようなもやがかかっていたのだが、血の巡りがよくなるにつれて記憶がゆっくりとだが戻ってきた。

「そ、そうだ･･････たしか、あたし、暗黒生物たちの襲撃を受けて、それで、えっと、えーと･･････」

自分の身に起こったことを懸命に思いだそうとしながら身体を起こす。

ぶるん。

「――え？」

胸元で、重い乳房がなんの妨害もなく揺れたことに気づいて、ティリエルは本能的に視線を下へと向けた。そして瞳をカッと大きく見開いた。

「ひっ！　な、なんでッ、どうしてあたし、裸なのッ！？」

自分が一糸まとわぬ全裸姿にされていることに気づいてティリエルは驚いた。自分の頭よりも大きな乳房はもちろん、まだ陰毛がほとんど生えていない未成熟なアソコも、熟れた肉付きがよいお尻も、なにもかもが丸出しの状態になっていたのだ。

　しかし、彼女はすぐに、そんなことがどうでもよくなるほどの事態に気づいて言葉を失った。

「え･･････？　こ、ここは、どこ、なの･･････？　へ？　え、え･･････」

自分の周りを見渡して、ティリエルの顔面から音を立てて血の気が失せていく。最初は小さかった心臓の鼓動が、ゆっくりと、しかし確実に大きくなっていくのがわかる。それと同時に、白い全身から汗が噴き出てきた。

ティリエルは、もう一度、同じ言葉を繰り返した。

「ど、どこなのよ、ここは･･････ここは、何処なのッ！？」

発する声の音量が跳ね上がった。驚くのも無理はない。彼女が目覚めたその場所は、上も、下も、右も左も、見渡す限りすべての面が、この世のモノとは思えない想像を絶するほどおぞましい色彩を帯びた脈打つ肉、肉、肉で構成されていたからである。しかも、窓や入り口らしきものもなく、さらに壁や天井からは、同じ肉成分で生体組織が構成されているであろう無数の触手や触腕が生えていて、それが生き物のようにうねうねと気色悪く蠢いていたのだ。その光景の気色悪さといったらなかった。

「ひ、ひぃいいいぃいぃぃぃぃぃいぃいぃぃぃいぃッッッ！　な、なにッ！？　なんなの、ここは！　何処なのッ！？　ここはいったい、どこなのよぉおぉぉおぉぉぉぉぉおぉぉぉおぉッッッ！？」

ティリエルは知る由もなかったが、ここは暗黒生物たちが本拠地とする肉の巣であった。この巣の中で、暗黒生物たちは休息し、負った傷を癒し、そして人間の女たちを使って繁殖活動にいそしむのだった。ゆえに、耳をすませば、遠くから肉苗床にされた女たちの悲鳴が微かに聞こえてくるのだが、恐慌をきたしたティリエルは自分のことで手一杯となっており、その悲惨で悲痛な声に気づくことができなかった。

　ゆえに、ティリエルは、その瞬間が訪れるまで、これから自分の身に降りかかる災厄を察することができなかったのだった。

「いやあああああああああああああああああああッッ！　出して、ここから出して！　出してったあぁあぁぁあぁぁぁあぁッッッ！　だしてえぇえぇえぇぇえぇえぇえぇぇえぇえええぇぇぇぇええぇぇぇぇぇッッッ！」

恐慌に駆られ、思考に混乱をきたしたティリエルは、手で大きな乳房とアソコを隠しながら、立ち上がり、声を大にして吠え叫んだ。この時、肉壁を手で叩かなかった理由は、肉壁があまりにも気色悪かったからであり、生理的嫌悪感に駆られて触る勇気がなかったからだ。

　その瞬間が訪れたのは、まさにその時だった。

ぐぐっ、ぐばああああぁぁぁあぁあぁぁぁ･･････っ。

突然、まるで口が開くようにして、肉壁の一角に大きな穴が開いたのだ。

「グゲッ、ゲッ、ゲッ、ブゲッゲッゲッ･･････」

　おぞましい声で鳴きながら、開いた穴から侵入してきた巨大で醜悪な化け物を見て、ティリエルは絹を裂くような悲鳴をあげた。

「きゃああああああああああああああぁぁああぁあぁあぁぁぁぁッッッ！」

穴から入ってきたその化け物は、濃酸を浴びて溶けかかったヒキガエルのような醜悪な造形をした暗黒生物だった。背丈は成人男性の二倍ほどで、横幅も同じくらいある。腹がでっぷりと出た肥満体で、手足は短い。ぎょろりとした眼球が半ば飛び出ており、ふたつの鼻腔が大きく開いていて、耳元まで裂けた口からは長い舌がだらしなく垂れていた。そして、その股間からは、人間の太腿よりも巨大な生殖器官が生えており、それは天に向かって硬く勃起し、そそり立っていたのだった。

「ひぃ、ひぃいぃいぃぃいぃいぃぃいいぃぃいぃぃぃいぃぃッッッ！　バ、バケモノッッ、バケモノおぉぉぉおおぉおぉおぉぉおぉぉぉぉッッ！　こ、こないでッッ、こっちにこないでッッ！　入ってくるなああああぁぁぁあぁあぁぁあぁあぁぁぁあぁッッッ！」

悲鳴をあげながら勢いよく後ろに下がり、肉の壁に背中をぶつける。辞書通りの意味でもう後がなくなったティリエルに向かって、ヒキガエルの化け物がゆっくりと近づいてきた。

「ゲゲッ、ブゲッゲ、ゲゲッゲゲッ」

「いやああぁあぁぁああぁぁぁぁあぁぁぁああぁぁあぁあぁぁぁッッッ！　来ないでッッ、こないでったらッッ！　どっか行きなさいよッッ、行きなさいったらあぁあぁぁあぁああぁぁぁああぁぁあぁあぁぁッッッ！　こっちに来るなあぁあぁぁあぁぁぁぁぁあぁぁあああぁぁあぁあぁぁぁッッッ！」

必死に叫び、怒鳴ることで追い返そうとするティリエルであったが、その直後、彼女の身に予想外の事態が生じる。

しゅるっ、しゅるるっ、しゅるしゅるしゅるるるる･･････っ！

後ろの肉壁から生えている触手がティリエルの四肢に巻きついたのだ。

「え･･････！」

突然のことに驚くティリエル。絡みついた触手が力強く彼女の身体を肉壁へと引き寄せると、四肢に絡みついた触手がティリエルの手を、足を、外側に向かってがばっと拡げた。

「ひっ、ひいぃぃいぃいぃぃいぃぃッ！」

触手たちによって身体が無理やり開帳された。大きな乳房がどんっと強調され、必然的にアソコも前面に押し出される形でさらけ出された。それはまるで仰向けにされたカエルのような体勢だった。

「い、いやああぁぁあああぁああぁああぁぁあぁあぁぁぁぁぁぁあぁあぁぁッ！　な、なんてことするのよッ！　は、恥ずかしいじゃないッ！　は、離してッ、はなしてッ、放しなさいったらッ！　か、隠させてッッ！　いやあああぁああぁぁあぁぁぁあぁあぁあぁぁあぁぁぁぁぁッッッ！」

白い芸術品のような裸体を余すとこなく晒されて、ティリエルはあまりの恥辱に顔を真っ赤にして泣き叫んだ。

恥ずかしいのだろう。いや、恥ずかしくないわけがない。彼女はまだ男性経験の無い生娘なのだ。淫らで豊満な肉体の持ち主とはいえ、他人に素肌を見せた経験は皆無に等しい。ゆえに、必死に手足をバタつかせ、白日に晒されている恥ずかしい場所をどうにか隠そうともがくのだが、手足に巻きついた触手はビクともしなかった。

　そうこうしているうちに、肉牢の中に入ってきた醜悪なヒキガエルのような暗黒生物が、その巨体を揺らしながら、ゆっくりと泣き叫ぶティリエルに向かって近づいてきた。

「ゲッ、ゲゲッ、グゲッゲゲ･･････」

「ひっ！　あ、あぁ･･････」

暗黒生物の醜悪な容姿がティリエルの目と鼻の先まで近づいた。ティリエルの顔に影が落ち、暗黒生物のおぞましい顔面を直視して、ティリエルの顔から意志の強さと血の気が音を立てて引いていった。

（こ、怖い･･････こわいいぃぃ･･････！）

それが、暗黒生物を直視したティリエルが率直に抱いた感想だった。怖い、恐い、こわい、こわい･･････。恐怖で奥歯がガチガチと鳴り響き、手足がカタカタと小刻みに震える。怖い、恐いのだ。暗黒生物の深淵のような暗い瞳が、ずらりと並んだ鋭い牙が、血を求めるがごとく蠢いている真っ赤な長い舌が、ぶつぶつの皮膚が、瘴気のように漂う臭気が、なにもかもが恐怖の対象でしかなかった。

「い、いや･･････た、たすけて･･････。い、命、いのちだけは･･････」

抵抗できない状態で、心の底から怯えているティリエル。恐怖で身体が弛緩したのか、彼女の意志とは関係なく股間から黄色い尿が漏れた。

「ゲッ、ゲッ、ゲゲゲッ、ゲ･･････」

その姿を見て、醜悪なヒキガエルのような暗黒生物が邪悪に笑った。そして、笑いながら、尿で濡れたティリエルの股間に、自らの股間からそそり立つ巨大な男性器を圧しつけたのだった。

ぐっ、ぐにぃいぃぃいぃいぃぃ･･････っ！

「ひっ、ひぃいいぃぃぃいいぃいぃぃぃぃいぃッッッ！」

股間から発せられたおぞましい感触に、ティリエルの背筋に強い電流が流れ走った。その電流は、彼女の美貌を恐怖で引きつらせ、見開かれた瞳を下へと誘った。ティリエルの絶叫がほとばしったのは、その直後だった。

「い、い、いやあああぁああぁあああぁぁあぁぁぁぁあああぁあぁあぁああああぁぁあぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁッッッ！」

ティリエルは我が目を疑った。自分の股間に、太い肉棒があてがわれているのを見たからだ。

　それはおぞましいほど醜悪な物体だった。大きさと太さは、人間の太腿ほどある。朽ちた毒キノコのような外見をしており、表面には無数のブツブツが突起していて、全体からまるで海が腐ったような臭いを漂わせていた。

　この物体がなにをするために存在しているのか――まだ男性経験の無いティリエルだが、性に関する知識は教養として持っていた。それはもちろん、男性器の構造から役割、そして仕組みにいたるまで、ひと通りの性知識は有していた。ゆえに、彼女は自分の美貌と肉体が世の男性を欲情させる力を持っていることを知っていたし、知っていたからこそ、これまでそれを武器にしてきたのだった。

　だからこそ、すぐに察してしまったのである。自らの股間にあてがわれた醜悪でおぞましい極太の肉棒が、これからなにをしようとしているのか。瞬時に理解してしまったからこそ、ティリエルは生理的嫌悪感と根源的な恐怖で身体の震えが止まらなくなってしまったのだった。

「う、嘘っ、うそでしょ･･････？　ううう嘘よね？　ま、まま、まさか･･････ま、まさか、そ、ソレを、あたしの中に――」

問いかける声は哀れなほど震えており、満面に恐怖を湛えた顔面からは、涙や涎だけでなく、鼻水もボタボタと滴り落ちていた。もう、ぐちゃぐちゃだ。顔中が、恐怖の汁でぐちゃぐちゃに濡れてしまっている。

　それを見て、醜悪なヒキガエルのような暗黒生物が「ニタァ～」と嗤った。底意地悪く、邪悪に。おそらくは、ティリエルの怯えた顔を見て嗜虐心をくすぐられたのだろう。醜悪極太肉棒の怒張が加速して、ティリエルの股間に対する圧力が強くなった。

ぐにっ、ぐっにぃいぃいぃぃいぃぃぃ･･････っ！

股間から来る不快極まりない感触が増したその直後、ティリエルの感情の堤防が決壊し、声となって口から飛び出した。

「ひぃいぃいぃぃいいぃぃぃぃいぃぃぃいぃいぃいぃいぃいぃぃぃいぃいぃぃッッッ！　む、むりッッ、そんなの無理いぃいぃいいぃぃいぃぃぃッッッ！　は、入らないッッ、入らない入らないはいらないったらあぁあぁあぁあぁぁあああぁぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁッッッ！　び、病気になるッッ！　そ、そんな不潔なモノ入れられたらッ、あ、あたしッッ、病気になるッッ、びょうきになっちゃうぅぅうぅうぅぅうぅぅうぅぅうぅぅぅぅううぅぅぅうぅぅぅぅッッッ！」

醜悪なヒキガエルのような暗黒生物が強く腰を打ち付けたのか、その直後だった。

　ブチィ、ブチブチッ、ブチチチィィィッ！

ずっ、ぶぅううううううううううぅぅぅうぅうぅぅぅ･･････っ！

「ぐぎゃああああああああああああああああああああああああぁぁあぁあぁぁあぁあぁぁぁあぁあぁぁあぁぁあぁぁぁぁぁああぁぁぁぁあぁあぁッッッ！」

処女膜が破れる音がして、筋が引き千切れる音もした。暗黒生物の醜悪な極太肉棒がティリエルの小さな膣穴を貫き、胎の中に深々と突き刺さった。その結果、ティリエルの白い腹が、暗黒生物の極太肉棒状にボゴッと天に向かって盛り上がり、彼女の腹部を歪な形に膨張させたのだ。

「うがああぁあぁぁぁああぁあぁぁあぁぁぁあぁぁああぁぁあああぁああぁあぁぁぁあぁぁぁあぁあぁぁッッッ！　お、お腹がッッ、おなかがあぁぁああぁあぁああぁあぁぁあぁあぁぁぁぁッッ！　ふ、膨れでッッ、ぐぎぃぎゃがああぁあぁああぁぁあぁああぁぁああぁあぁあぁあぁぁああぁぁあぁぁあぁあぁぁああぁああぁぁああぁぁぁッッッッ！」

貫かれなかったとはいえ、巨大な異物の挿入によって体内の臓器を圧し潰されて串刺しにされたのだ。その痛み、その苦しみ、そして猛烈な圧迫感は、もはや言葉で表現できるものではなかった。

「ぐがあああああぁぁああああぁぁぁぁああぁああぁあぁぁああぁああぁあぁあぁぁあぁああぁぁぁあッッッ！　ぬ、抜いてッッ、おおおお願いッッ、い、いますぐッ、今すぐ抜いてッッ！　ぬいでっだらああぁあぁぁぁあああぁあぁぁあああぁあぁああぁああぁぁッッッ！　んぎゃああああぁあぁぁあぁぁぁああぁぁぁあぁぁぁあああぁぁああぁぁぁぁああぁあぁぁああぁぁあぁあぁぁああぁぁぁぁッッッッ！」

頭を後ろに仰け反らせ、半ば白目を剥きながら、口から泡を噴き、虚空に向かって狂ったケダモノのように吠え叫ぶティリエル。手足が自由であったなら、ささやかでも抵抗できたに違いない。しかし、四肢を触手によって拘束されているため成す術がなかった。そう、もはやされるがままだ。

「グゲゲッ、ゲゲッ、グゲッゲ、ゲゲゲッ！」

醜悪なヒキガエルのような暗黒生物が腰を動かしはじめた。ティリエルの胎に突き刺している醜悪極太肉棒をゆっくりと引き抜き、そしてまた杭を打ち付けるように膣の中へと挿入する。淫猥な音が辺りに響いた。

　ずぐぢゅぅっ、ずぐぢゅぅっ、ずぐぢゅぅっ、ずぐぢゅぅっ･･････。

腰を動かしてティリエルの膣から血で濡れた巨大な生殖器官を引き抜くと、それをまた腰を動かして圧し戻す。それを繰り返すのだ。何度も、何度も、作業的に。

そのつど、湿り気を帯びた卑猥な音が辺りに響いて、ティリエルの腹が極太肉棒の形にボゴッと大きく盛り上がり、引き抜かれるとベゴッと凹む。極太異物の挿入が繰り返されるつど、内臓全体に強い痛みが蔓延って、ティリエルは顔中から汁という汁を撒き散らして狂ったように泣き叫んだ。

「ぐぎゃああぁぁあぁぁあぁああぁぁぁぁあぁぁあぁあぁぁぁああぁあぁぁあぁあぁあぁあぁあぁぁぁあぁあぁあッッッ！　痛いッッ、痛い痛いいだいぃぃいぃいぃぃいぃぃぃいぃッッッ、いだいっだらあぁぁあぁあああぁぁぁあぁぁぁぁぁッッ！　があぁあぁぁああぁあぁぁぁぁッッッ！　ぐるじぃッッ、おおおお腹がッッ、おなかがあぁあぁぁあぁあぁあぁぁあぁぁぁぁぁッッッ！　ぐうがああぁあぁぁあぁぁあぁあぁぁあぁあぁぁああぁぁああぁあぁぁぁッッッ！」

白目を剥きながら身体を震わせ、歯茎を剥きながら泡を噴く。醜悪なヒキガエルのような暗黒生物が腰を力強く打ち付けるつど、鉄槌で殴打されたような衝撃が胎に響き、極太肉棒が引き抜かれるつど表面のブツブツで膣肉が掻き混ぜられる。ひと突きごとに女性器をめちゃくちゃにされるのだ。それが何度も何度も繰り返されるのである。その凄まじい暴虐といったらなかった。

　ずぐぢゅっ、ずぐぢゅっ、ずぐじゅっ、ずぐじゅっ、ずぐじゅっ、ずぐじゅっ、ずぐじゅっ、ずぐじゅっ･･････。

「ぐがああぁあぁあぁあぁぁああぁああぁぁぁああぁぁあぁぁああぁぁあぁぁあぁあぁあぁあぁあぁぁあぁぁッッ、があああああああぁあぁあぁあぁぁぁあぁぁあぁあぁぁぁぁッッ、がぁッ、がががッ、うぐうごがあああぁああぁぁああぁあぁぁあぁあぁぁああぁあぁあぁあぁぁあぁあぁぁあぁぁあぁあぁぁああぁぁぁあぁッッッ！」

この世のモノとは思えぬ蹂躙行為に責め苛まれて、ティリエルは末期の狂犬のような形相で吠え叫んだ。見開かれた大きな瞳からは滝のように涙が溢れ、涎や鼻水と混じりあってボタボタと滴り落ちる。胃の中のモノが逆流し、食道を灼きながら口から溢れ、吐しゃ物が肉の床の上に撒き散らされた。それでもなお、醜悪なヒキガエルのような暗黒生物は、腰を打ち付ける行為を止めようとはしなかった。

ずぐぢゅぅっ、ずぐぢゅっ、ずぐぢゅっ、ずぐじゅっ、ずぐじゅっ、ずぐじゅっ、ずぐじゅぅっ、ずぐじゅっ、ずぐじゅっ、ずぐじゅっ、ずぐぢゅぅっ、ずぐぢゅぅっ、ずぐぢゅぅっ･･････。

醜悪で凶悪な極太肉棒で、何度も何度も繰り返し胎を内側から殴打され、たまらずティリエルは盛大に嘔吐した。

「ぐげえぇえぇえぇぇえぇええぇぇぇえぇえぇぇぇえぇぇえぇぇえぇぇぇえぇぇえぇぇぇぇッッッ！　ぶげッ、ぶぼげえぇぇぇぇええぇぇぇえぇぇえぇえぇぇえぇぇッッッ！　や、やべでッッ、じ、死ぬッッ、しんぢゃうがらッッ！　や、やべでッッ、ももももうッ、うあべでっだらあぁぁぁぁああぁぁぁあぁあぁぁあぁぁあぁぁぁぁぁッッッ！　ぐえッ、ぶげッ、ぶぼっげえぇぶべえぇぇえぇえぇぇぇえぇぇぇぇぇええぇぇぇぇぇええぇぇえぇぇぇえぇぇえぇぇぇぇぇッッッ！」

　びちゃあぁっ、びちゃびちゃっ、びちゃちゃちゃちゃあぁあっぁあぁ･･････。

　ティリエルの口から盛大に噴き出した大量の嘔吐物が、彼女を犯す暗黒生物のでっぷりとした腹に命中した。

その、直後だった。

「ゲッ、ゲゲッ、グゲゲゲゲッッッ！」

ビクンッ！　ビクビクッ、ビククッ、ビクビクビクククククッッッ！

ティリエルの胎の奥に深々と突き刺さった極太肉棒が激しく脈動したのだ。度重なるピストン運動の果てに、溜まっていた快感が、外部からの刺激によって一気に絶頂に達したのである。

次の瞬間、まるでティリエルがした嘔吐のような勢いで、胎に深々と突き刺さった極太肉棒の先端より、濃厚でドロドロとした灼熱の液体が勢いよく噴き出したのだ。

ドブッ、ドブドブッ、ドブドブドブブブビュルルルルルルルルルルルルッッッ！

「ぐごばああぁぁあぁぁああぁぁぁあぁぁあぁぁあぁぁぁぁああぁぁあぁぁああぁぁあぁあぁぁあぁああぁぁああぁああぁああぁぁぁああぁぁぁあぁぁあぁぁぁぁあぁぁあぁぁあぁぁぁぁあぁぁあぁぁッッッッ！」

　たまらず吠え叫ぶティリエル。

　しかし大量射精の勢いは衰えることなくなおも激しくなる一方だ。

ビュルルルルルルルルッ、ドブドブドブビュクビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルッッッッ！

　出る、出る、大量に出ている。ティリエルの子宮の中に、胎の中に、濃厚でドロドロとした白濁の液体が放出されているのだ。

人間では決してありえない大量射精によって、ティリエルの腹部が爆発的に大きくなった。大量の精液によって子宮が一気に膨張し、巨大化したのだ。その大きさたるや、臨月妊婦の倍以上のボテ腹である。凄まじい圧迫の苦しみに襲われて、ティリエルは咽喉を振り絞るように呻き叫んだ。

「ぐがあああぁぁあぁああああぁぁああぁぁぁあぁあぁぁあぁああぁぁあぁあぁぁぁぁあぁぁぁッッッ！　で、出でるッッ！　お、お腹のながにッッ、せ、精液がッッ、ででりゅぅうぅぅうぅぅうぅぅぅううぅぅうぅぅぅぅぅぅッッッ！　うぐがああぁぁあぁぁあぁあぁああぁぁあぁぁぁぁぁあぁぁあぁぁぁッッッ、ひぐぅッ、ぎぃッ、ぐげごがぐごごがあああぁあああぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁあああぁぁあぁあぁぁぁああぁぁぁあぁぁぁぁぁあぁぁあぁぁぁッッッッッ！」

とても女が発しているとは思えない酷い咆え声をあげながら、狂ったように頭を振り乱すティリエル。人体構造の何処からこのような音が生じているのか不思議に思えるような濁声絶叫の奔流だ。

しかし、無理もない。大量射精によって腹が限界を超えて膨らむ超圧迫は、言葉では表現できないほどの痛みと苦しみでもって彼女の痛覚神経を配慮なく掻き毟ったからだ。ゆえに、その痛みと苦しみを少しでも紛らわせるためには、吼えるしかなかったからだ。

　大量射精はなおも続いている。

　ドビュルルルルルルルルルルルルルルッ、ビュクビュクビュルルルルルルルルルルルルッ、ドブドブドブビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルッッッ！

「うぐがああああああああああああああああぁあぁぁぁぁあぁあぁあぁぁあぁぁぁぁぁぁぁッッッ、があああああああああああああああああああッッッ、ふんぐがあああぁあぁあぁぁああぁあぁぁあぁぁああぁぁぁあぁぁああああぁぁあぁあぁぁあぁあぁぁぁあぁあぁあぁあぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁッッッッ！」

　出る。出る。出る。まだ出る。出まくる。大量に、出される。子宮の中に、胎の中に、ぶち撒けられる。

　肉棒から放出される大量の濃厚精液は、そのままティリエルの胎の中に溜まってゆき、彼女のボテ腹をさらに大きく膨らませてゆく。まるで水を注入される風船のように、皮膚を伸張させ血管を浮き上がらせながら、丸々と大きく膨張してゆくのである。

　むぐぅ、むぐむぐ、むぐむぐむぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐううぅぅぅうぅうぅうぅぅううぅぅうぅうぅうぅぅうぅうぅうぅ･･･････っっっ。

「ぐがあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああッッッッ！　ぐるじぃッッ、ぐるじぃッッッ、ぐるじぃいぃぃいぃぃいぃぃいぃぃいぃぃいぃぃぃぃぃッッッ！　やべでッッ、おおおおおねがいッッッ！　もももももうだざないでえぇぇぇええぇぇえぇぇぇええぇえぇぇぇぇぇえぇぇぇぇぇえぇぇぇッッッ！　は、破裂すりゅッッ、はははははれづしぢゃうがらッッッ、もうやべでッッ！　もももももうだざないでえぇぇえぇぇえぇぇえぇぇぇええぇぇえぇぇぇぇえぇぇえぇえぇえぇえぇぇぇぇぇえぇぇぇえッッッ！　んぎゃああああぁあぁあぁぁぁあぁぁぁあぁあぁあぁあぁぁぁぁぁああぁぁぁぁぁああぁぁぁああぁぁぁぁあぁぁぁぁあぁあぁあぁぁぁぁああぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁあッッッッ！」

　醜悪なヒキガエルのような暗黒生物による大量射精は、人間では考えられないほど長い時間続いていたが、それでも有限行為である以上、いつかは終わりがくる。最後の一滴にいたるまで出して怒張が萎えた時、極太肉棒がティリエルの膣穴からずるりと引き抜かれた。肉棒が引き抜かれると同時にどろりと濃厚な白濁液が滴り零れたが、その量は射精した量の一パーセントにも満たず、出された大半の濃厚精液はティリエルの胎の中に溜まったままだった。

「が、あが、がが･･････ぐがが、がが･･････」

壊れたカラクリ人形のような音を立てながら、ティリエルは白目を剥いた状態で意識を失った。その直前、彼女は自分の卵子が、数十兆匹の精子に蹂躙される音を聞いた気がしたが、そのことについて思考を巡らせるほどの余力は、もはや彼女には残されていなかった。

「ゲゲッ、ゲゲゲッ、グゲッゲゲゲゲゲ･･････」

「あ、ああ、ぁ･･････」

暗黒生物の下卑た笑い声を聞きながら、ティリエルの意識は暗くて深い闇の底へと落ちていった。

　　　　　　　･･････続きは本編でお愉しみください。